コラム 6-3　音楽は文系か，理系か

音楽（西洋音楽）は，基本要素を数の規則によって説明できることから，理系の性質が強いことがわかっています（Lecture 10 の「認知スタイル」とも関係があります）。プロのオーケストラ奏者を調べると，大半は理系的認知処理に優れた理系脳だという研究もあります。大学のオーケストラでも，メンバーの多くが理系学部所属であることがよくみられます。

しかし，皆さんの多くは「音楽は文系」と思っていたのではないでしょうか。これは日本の特殊事情で，明治時代に西洋音楽を輸入した日本政府は，西洋音楽の普及・教育のために，唱歌を特に小学校などの音楽教育を通して積極的に広めました。そのため，子どもの頃からほとんどの日本人は音楽＝歌という刷り込みができています。歌には歌詞がついていて，歌詞は言語なので文系的と思ってしまうことが多いのです。

象徴的なこととしては，かつて（センター試験などのような統一試験制度が始まる以前，各大学で入学試験問題が作成されていた時代）国立大学では文系学部でも数学と理科の試験は必須でしたが，芸大だけは数理科目の試験を選択しないことが可能でした。これは音楽などの芸術には理系的な能力はなくてもよいという考え方を端的に表しています。

しかし，音楽にとって，歌詞は必然的なものではありません。歌詞はあくまでも付随物で，本来音楽自体に言葉は必要ありません。日本でも，著名な作曲家には，理系学部出身の人が何人もいます。世界的な指揮者にも，数学者や医学者などが結構いますが，文学者というのはあまり聞きません。

一方で、今も現役のシンガーソングライターのさだまさしさんは，中学生時代に出身地の九州ではヴァイオリンの才能があるということで東京に出てきましたが，ヴァイオリニストになることはなく，当時（半世紀近く前です）のフォークソング流行期にシンガーソングライターとして成功しました。さだまさしさんの才能は，器楽演奏のような音楽の理系的側面よりも，作詞という言語的能力のような文系的側面にあったのではないでしょうか。具体的な音楽には，多様な能力が関係しているということでもあります。